

CLC からしだね書店便り



9 2021
September

CLC からしだね書店では…

- ① キリスト教書のほか、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書の販売もする予定です。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供したいと考えています



『約束された場所で underground 2』

村上春樹著 文春文庫



2018年7月6日の朝、私は知人の結婚式に出席するため、空港のロビーで飛行機を待ちながら、ベンチに座ってなんとなく大型のテレビを眺めていました。テレビでは西日本の豪雨災害のニュースが流れていて、飛行機がちゃんと飛ぶだろうかと心配したのを覚えています。

すると突然テレビの画面にテロップで速報が流れ、オウム真理教の教祖・麻原彰晃こと松本智津夫、及び同教団の幹部信者だった複数の死刑囚の死刑が執行されたことが報じられました。ニュースは中断され、死囚たちの顔写真と年齢がテレビ画面に映されました。私はオウム真理教の起こした一連の事件や教団そのものに関心があつたので、以前から何冊かの関連書籍を読んでいろいろと考えていました。それらの本を読むと、彼らの犯した事件の悲惨さ、取り返しのつかなさ、理解のできなさが大きくなるばかりで、途方にくれてしまいました。そんな彼らの死刑がついに執行された、しかも7人同時にという衝撃的なニュース(同じ月の26日に、残る6人の死刑囚の死刑も執行されました)に接して、結婚式に行くという事で多少浮ついていた気分も一気に醒め、暗澹たる気持ちになったことを覚えています。

オウム真理教は「人類の救済」を謳っていました。教祖たる麻原彰晃が、彼の言う「救済」をどれほど本気で信じて行動していたのかは分かりませんが、少なくともサリン事件等の実行犯の中には、本気で人類の救済を志してオウム真理教に入つた者もいたということです。そんな彼らが「救済」とは正反対の結果を産むことになったのはなぜか。宗教的理念や大義を隠れ蓑にして自分たちの欲望を満たそうとしたのであれば話はわかりやすいでしょう。しかしオウム事件が私たちを困惑させるのは、彼ら実行犯たちが「人類の救済」という、それ自体は間違っているとは言えない動機から、あのような悲惨な事件を起こしてしまったということです。もちろん善意の人を傷つけるというのはよくあることです。しかしオウムの場合は、理念を表す言葉と、それに基づいて行つたことの結果があまりにもかけ離れているため、日常的な感覚ではその間にある

ギャップを捉えきることができないのです。13人の死刑が執行されても、それを捉えられないならば、オウム真理教は「大きな名づけようのない疑問」として、私たちの社会に残り続けるのではないのでしょうか。

オウム関連の書籍はたくさんありますが、上に書いたような疑問について考える上で示唆に富む本があります。作家の村上春樹がオウム真理教の信者や元信者8人に行つたインタビューをまとめた『約束された場所で underground 2』(文春文庫)です。

インタビュイーの8人はいずれもオウムの犯罪に直接関わつてはいません。オウムに入信した理由はさまざまで、超能力に惹かれた人、終末論的な世界観に惹かれた人、そんなことよりも「解脱」することが重要だという人などバラバラです。しかし彼らに共通する要素もあつて、それは彼らのいう「現世」(一般の社会)に馴染めなかつたり、そこに価値を見出せないという感覚です。信者・元信者達はその感覚を、「自分がこの現実社会の中で、こうやって生きていくということに対して、何か『足りていない』というように感じていました」(『約束された場所で』p116)、「体の中に大きな風穴が開いている」(同書p89)、「そこにある『大人の社会』に、僕はどうしても馴染むことができなかったんです。なんだかすごく歪んでいるように感じました」(同書p237)、などと表現しています。こうした感覚を持つ人は社会の中には一定数いるのではないのでしょうか。そういう人は普通、哲学の本を読んだり、芸術や宗教活動に打ち込んだりするわけですが、彼らの場合たまたまそこで出会つたのがオウム真理教だつたということなのかもしれません。そう考えると、オウムの犯罪に直接関わつたわけではなく、それどころか犯罪の事実を知らされてもいなかつた彼らは、「結果的に犯罪者集団の一員になってしまつていた」とも言えるのです。

しかし他方で、「もしトップの麻原彰晃や幹部たちが暴走しなければ、彼らはこんな事件に巻き込まれず平和に宗教活動をしていたはずだ。だから彼らもまた被害者なのだ」と言つて済ませてしまえるのかという疑問は残ります。少なくとも彼らの姿勢の中には、組織の内部にいながら麻原の暴走を止めることができないような「何か」があつたとは言えるでしょう。その「何か」について村上氏は、信者・元信者らに見られる「広い世界観の欠如」と「言葉と行為の乖離」という指摘をし

ています（同書p327）。村上によると、「宗教的な話になると、彼ら〔信者・元信者〕の言葉には広がりというものが無い」（同書p295）のだそうです。そして「彼らにとつての実際の世界の成立の仕方は、奇妙に単一で平板なんです。あるところで広がりやが止まってしまっている」（同書p296）と言います。現実の世界は、矛盾や混乱を含んだ、単純には説明のつかない複雑なものであるはずですが、彼らの世界観の中では、そういう複雑であるはずの現実が、固定的な教義できれいに（整合的に）説明されてしまっているというのです。しかしそのようにして「きれいに説明されてしまった世界」は、もはや矛盾や混乱を含む現実の世界ではなくなり、そうした説明の言葉は現実から乖離していく、というのが村上の見立てです。そしてその乖離が極端な形で現れたのが、「ボア」や「救済」という名の下に行われたオウムの事件だったということです。たとえば地下鉄サリン事件の実行犯である林郁夫は、サリンを撒くよう命令されて激しく動揺しましたが、「真理のため、救済のための戦いなんだ」と考えることで心の迷いを抑え、目の前の乗客に対しては「これは戦争なのです。高い世界にボアされてください」と念じ、ついにサリン散布を行いました（江川紹子『カルト』はすぐ隣に』岩波書店p150～151）。村上は、地下鉄サリン事件の実行犯である林のこのような思考パターンに通じるものを、無垢な信者・元信者たちのなかにも見出ししました。林もやはりオウムという狭い世界の中だけで通じる、広がりのない言葉と論理で自らの行為を説明しようとした。その結果彼の行為は彼の持っていた宗教的理念とはかけ離れたものになってしまったのです。

このような「言葉と行為の乖離」という現象が極端な形で見られたのが、宗教団体であるオウム真理教においてであったということとは、注目すべきことだと思います。「オウムのような団体は真の宗教ではない」と言ってオウムを例外的なものに見なすより、むしろ宗教が本来的に持っている性質がオウムの悪を助長したと考える方が、正確な認識ではないでしょうか。その性質とは宗教における言葉の強さです。宗教がその理念を表す言葉を繰り返して説くことで、その言葉はどんどん強くなっていき、多様な現実をたった一つの言葉で説明してしまうほどの力を持つようになり、さらにはその言葉の持つ本来の意味の範囲から逸脱した事態をも、その言葉で説明できてしまうようになる、ということが起こり得ます。事実、殺人を罪とし、愛を説く宗教が戦争を正当化するのに使われたり、戦争に負担してきた歴史があります。

私たちは言葉を使うときに、言葉の持つ限界と強さを自覚し、絶えずその言葉が現実から離れていないか確認し、離れていけば言葉をよりよいものへと更新していかなければなりません。そうした努力を怠ると、美しい言葉を使いながら平気で悪を行うことになりかねないからです。

でも実を言えば私たちが林医師〔林郁夫〕に向かつて語るべきことは、本来はとても簡単なことであるはずなのだ。それは「現実」というのは、もともとが混乱や矛盾を含んで成立しているものであるのだし、混乱や矛盾を排除してしまえば、それはもはや現実ではないのです」ということだ。「そして一見整合的に見える言葉や論理に従って、うまく現実の一部を排除できたと思っても、その排除された現実には、必ずどこかで待ち伏せしてあなたに復讐することでしょう」と。（『約束された場所で』p329）

【書店員C】

《お知らせ・1》

- ◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文がある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。
- ◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品（グッズ）の訪問販売を検討させて頂きます。ご相談ください。
- ◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思います。

《お知らせ・2》

- ◆からしだねの「おすすめ本スポンサー」システム
**あなたのイチ押しの本を、
店に置かせていただきます**
- 「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのおすすめ本。3か月間店頭においてみませんか？残念ながら売残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。（書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。…そうならいいなと思っております。）店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

【登場】大塚の物語

第8回「びっく」から始めよう

臨床心理士
坂岡 大路

1988年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、中学校、児童デイサービスなどのボランティアを経て、現在、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019年『成長』(いのちのこぼれ)誌に「ころんで学ぶ教会学校」を連載。



昔、ある高校生からおそろおそろこんな話をされたことがあります。「この前、電車の中で『ああー』って、大きい声で叫んでいる人がいたんだよね…。そう思っちゃいけないのかもしれないけど、正直怖かった。ああいうのって『心の病気』がある人なのかな?」

なんと答えていいものか、一瞬戸惑いました。「私の答え方一つで差別や偏見につながってしまうかもしれない」と不安になったのです。しかしよくよく考えてみると、彼女が本当に知りたいと思っっているのは「その人が病気がどうか」ではないのだと気づきました。

「いきなり電車の中で大きい声が聞こえてきたら、そりゃあビクツとするよね。でも、その人にもきつと何か事情があるだろうって。それを知りたいと思ったってことだよな。」

「うん…。でも、病気なんだったら仕方ないし、怖いつて思っちゃダメだよな。」

「うーん、自分の理解の枠組にないものを『怖い』と感じるのって、人として自然な反応だと思う。『怖い』と感じられなかったら、危険から身を守ることもできないよね。」

「そっか。じゃあ、『怖い』と思ってもいいのかな。」
『怖い』で終わりにするんじゃないかって、『怖い』をきっかけに『知ろう』としてくれるよね。そこが大事なんじゃないかな。だいたいこんな会話だったかと思えます。私はこのやり取りのあと、聖書のある言葉を思い出しました。

「身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になっている』と言われていたからである。』(マルコによる福音書)(口語訳) 3:21



イエス・キリストですら、あまりにも「理解の外」の振る舞いをしていたため、「気が変になっている」とか、「悪霊に憑かれている」と言われていたのです。しかし、「わからない」という状態にもちこたえるのは結構しんどいものです。「わからない」ショックやモヤモヤに耐えられない時、人は無理やり「わかりやすいストーリー」に収めて、説明を完結させようとします。「わからない」・「恐ろしい」といった感情の、彼らなりの収め方。それが、「悪霊に憑かれた」とか「気が変になった」というラベリングなのでしょう。



ところで、「この『気が変になっている』ですが、もとのギリシヤ語(聖書原文)をたどるとなかなか興味深い表現なのです。この部分の単語は、直訳的には「外に立つ」という意味であり、文脈によっては「驚く」とも訳せます。つまり、「自分という枠組みの外に立たされる」イメージです。今までの狭い世界観や価値観では包摂できない出来事に会った時、人は驚き、揺さぶられる。しかし、問題はその後です。「ああ、びっくりした。怖かった」で終わりにするのか。それとも、「あれは『精神の病気』だから」といった、浅いレッテル的理解ですませてしまっのか…。

私は第三の道があると思います。「びっくり」「もやもや」「なんだなんだ?」といった感覚を、「コミュニケーション」のきっかけにするのです。私の友人に、ダウン症のお子さんを育てている(むしろ、お子さんから育てられている?)お母さんMさんがいます。Mさんのすいこのころは、「もやもや」を絶対にそのままにせず、グイグイと突っ込んでくる突破力です。少しでもひっかかるころや、「なんで?」「どうして?」と思ったことがあれば、しっかりと向き合い、対話しようとする。しかも決して押し付けがましくなく、お互いの実感を照らし合わせながら考え抜こうとするのです。

特に「ダウン症」を理由に隔離しようとする社会の対応については、なあなめで済ませることをせず、お互いに納得できる道をととん一緒に切り開いていこうとする。実にバワフルでエネルギーな方であり、それに巻き込まれて、「コミュニケーションが少しづつ変わっていく。」やらなければ変わらない。やれば変わる。言われてみれば単純な原理ですが、まさにそのことを実感させてくれる方です。



Mさんは、「自分のことを、ユーモアも込めて「インクルージョン原理主義者」と呼んでいます。私の目から見れば、「原理主義」とは程遠いオープンな姿勢を感じるのですが、おそらく、それくらい確固たる信念があるということでしょう。その信念とは、「どんな弱さがあっても、一人ひとりが異質で多様なまま、共に生きていける社会」という「インクルージョン」の理念です。

Mさんのお子さん、中学生のTくんは、今年から中学生になりました。Tくんは「特別支援学級」ではなく、「普通学級の」の一員として、みんなと一緒に学んでいます。選別して分けたり、見えないところに隔離してしまうのではありません。一緒に生活してこそ、お互いのちがいを知り合える。理屈ではなく、体感で〈共生〉を学び合っていける。その信念から、Mさんは学校とじっくり交渉してここまでこぎつけたのです。学校側に一方的に押し付けるという態度ではありません。Mさんは、Tくんの個性を伝える紙芝居を作ったり、生徒の前で発表するなど、保護者としてできる配慮を最大限にしました。今も先生や他の保護者とのコミュニケーションを丁寧に取り続けています。

ある日のFacebookで、Mさんはこんな報告をしてくれました。少し長くなりますが、引用させていただきます。

昨日、Tの学校からそれぞれ小冊子が届いた。クラスメイトたちからのメッセージ。Tの冊子には『1分間スピーチ、ありがとう!』の題名で、クラスの一人一人が、Tのスピーチを受けて、メッセージを書いてくれる。

感心するのは、ひらがなで書いてくれてる、もしくは、読み仮名をふつてくれてる子が多いこと。絵をかいてくれてる子もいる。

子どもたちは『合理的配慮』なんて言葉は知らないけど、Tを知ってるから、自然にできてるんだと思う。Tは、私に、『読んで!』と言い、ニコニコしながら、全員のメッセージを私が読みあげるのをじっと聴いていた。Tのバッグから、数枚のメモ用紙も見つけた。

一つには『しずかに』と書いてある。多分、集会の時とかに、見せるように作ってくれたのかもしれない。もう一つには、足し算の問題が、絵付きで書いてある。Tに聞いたら、この絵は、ホットドッグらしい。Tの大好物の絵で、足し算を教えようとしてくれたらしい。一(マイナス)の概念にも、果敢に!チャレンジしてくれたみたいだ。

何度も言うけど、『合理的配慮』なんて言葉は知らなくても、共に過ごしていれば、自然と出てくるものなんだと思う。Tと、周りの子どもたちの学びを見てください、学校よ!社会よ!

もちろん、実際の学校生活ではFacebookに書けないような大変なこといろいろとあるでしょう。ダウン症の子と初めて知り合った生徒さんたちは、最初は驚いたり、戸惑ったりしたことでしょう。お互いに腹が立ったり、もめたりすることもあるかと思えます。しかし、少なくとも彼ら・彼女らからは、「ダウン症だから」「自分とはちがうから」という理由で思考停止してしまう姿勢は感じられません。実際に共に生きてみて、「すったもんだ」する中で、お互いのリアルを知り合っていたはずなのです。

この文章の冒頭で、「怖かったけど『心の病氣』なのかな?」と話してくれた高校生の話を紹介しました。この疑問に対して、私が「心の病氣」に関する精神医学的知識を授けたとして、それは果たして、その人のことを「知った」ことになるのでしょうか?むしろ彼女は、異質な他者について「知りたかった」のに「知る」「体感する」機会をもてなかった、ということがありません。その気づきから、本当のコミュニケーションが始まります。リアルな他者との共生はきれいごとではすみません。しかし、だからこそ、今までの狭い視野を超えた所まで、私たちを導いてくれるのです。「びっくり!」「もやもや」から「共に生きる」を始めよう。MさんとTくんの姿を見て、私はそんなセリフを言いたくなったのです。





障害のこと、福祉のことで「こんなことを聞いてみたい」ということがあれば、ぜひ、CLC からしだね書店 (clc@karashidane.or.jp) までお知らせください。

こころの病や障害のある人の支援をしたい、と希望に満ちて精神保健福祉士の実習のためにからしだねにやってきた大学生のAさん。実習開始とともに、思い通りにいかない毎日の連続。彼女は「自分への信頼」も「他者への信頼」も喪っていききました…。(詳細は8月号をぜひお読みください)

からしだねの実習で得たものは…
彼女は、精一杯実習に取り組みました。からしだねの当事者と作業をしながら、障害のある人の「働く」について考えようと、時間のゆるす限り彼らに積極的に話をしました。しかし、目の前の当事者がどんなことを考えたり感じたりしているのかがよくわからず、会話がかみ合わなかったり、深まらなかったりと苦戦しました。2週間という限られた期間の中で、「こころの病気や障害のある人の理解を深める」という実習の目標に果たして近づいているのかどうか…。実感のないまま、1日1日が過ぎていきました。

あっとい間に最終日になりました。その日のミーティングで「こころの病気や障害のある人について、実習前と後とは何かご自身の考え方や理解の仕方に変化はありましたか」と尋ねました。彼女は「精神障害のある方はみなさん能力が高いので、(からしだねのような福祉的就労ではなく)一般で就労されればいいと思います。」と答えました。彼女はきっと、当事者がいるんな可能性を持っているというポジティブな意味でその発言をしたのでしょうか。しかし、彼女の発言からは、当事者の本当の生きづらさや抱えている課題を果たして感じられたのだろうか、と思わざるをえませんでした。実習指導をした私としては、からしだねでの実習が彼女にとってどうだったのか…。手ごたえを感じられないまま彼女を送り出しました。

厳しい評価

実習を終えた学生には、実習指導者が評価をつけます。こころの病や障害のある当事者への理解、ソーシャルワーカーとして現場に出た時に必要とされる資質やスキルなど、複数の評価項目に5段階での評価をつけます。実習先の評価が学生の成績全てを左右するものではないようですが、現場からの評価は、ソーシャルワーカーを目指す学生たちは重要な評価と受け止めるでしょう。

ものすごく悩んだ結果、心を鬼にして私は厳しい評価をつけることにしました。そして、なぜその評価をしたのか、根拠を一つ一つ文書で説明しました。これをもって、実習指導者としての私の役割を終えました。

厳しい評価に対するAさんの反応

2か月くらいが経過して、彼女から電話が入りました。「先日大学から実習の評価を受け取った」とのことでした。そして、次のようなことを話してくれました。

彼女は、今までも授業についていけなかったり、提出期限が守れず単位を落としかけたことが何度かありました。大目に見てもらったり、追加のレポートを書くことで何とか4年生の半ばまでやってきました。「他の学生もこんなもんだらう。何とかなるだろう。」と自分に言い聞かせ、深く考えないようにしました。からしだねの実習はけっして「うまくいった」「手ごたえはなかったのですが、いつものように評価は「平均」くらいだろうと思っていました。しかし、実際に評価を受け取ったら、想像よりもずっと低い評価でした。彼女はその時「これが自分が受け取るべき評価なんだ」「からしだねは自分のことを、適切に評価してくれている」と思ったそうです。

「弱さ」の意味を考える

彼女は、なぜこの評価になったのか、根拠を記した説明文書を何度も読みました。そして、今までうすうす感じていた「うまくいかない」ことは、努力の足りなさや、たまたまうまくいかなかったのではなく、自分の「弱さ」と関係しているのではないかと考えました。

他者とのコミュニケーションや記録を作成する作業で、頑張ってもなぜかつまづいてしま…。これまで嫌になるほど自分の「弱さ」を突き付けられてきたのです。しかし「弱さ」は人の価値を低くしてしまうものだ、必死に隠そうともがいてきました。

弱さは隠すものではない、一緒に生きていくものなのかな。障害のあるからしだねの当事者も「弱さ」があるから福祉のサポートを受けている。その「弱さ」は時として、誰かの助けを必要とする。そんな時は助けてもらえばいいんだ…。

自分の「弱さ」と生きる

その後、サポートを必要とする学生のための相談窓口で自分の「弱さ」についての相談をしました。彼女はレポートを作成するときに、大学のスタッフのサポートやアドバイスをもらうようになりました。からしだねで出会った当事者が、自分一人で頑張るのではなく、第3者の助けを借りていたように、自分も誰かに助けてもらおうと思ったそうです。

彼女は「弱さ」に気づけて嬉しかった、実習は自分にとって本当に有意義だった、と言ってくれました。「弱さ」に気づけた自分を、彼女自身がとても喜んでいました。私から見ると彼女は、「自分への信頼」を取り戻していました。そして、うまく助けてもらえるようになった彼女は「他者への信頼」も取り戻していたように思います。

彼女の「弱さ」がなくなっただけではありません。しかし、その「弱さ」の中で生きていくことを受け入れたことで、彼女は「弱さ」を持っていきます。けれども、「弱い人」であるだけではありません。「弱さ」を受け入れること

のできる「まじめさ」「素直さ」「強さ」を持っていきます。

弱さから見える世界を、彼女がシェアしてくれたことを本当に嬉しく思っています。



献本についての お知らせ

たいへん申し訳ございませんが、
送料をご負担いただけると
ありがたいです。
書店への直接お持ち込みも
ありがたいです。

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025
Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②ご住所③電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思えます。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

【献本感謝】

井上真詞様、新崎富晴様・三紀子様、西浦園子様、西谷寿佐美様、堀口進様、新谷正明様、渡辺日登美様、長瀬智子様、杉野マリ子様、山田昌昭様、深谷純一様、勝藤美代子様、ロゴス社様

編集後記

◆いろいろな意味で厳しかった夏を越え、ようやく秋を迎えました。◆コロナ真ただ中の開店から始まり、拡大していくコロナの脅威、京都滋賀にも緊急事態宣言…。私たちのやっていることは、コロナ前のキリスト教書店の動きとはずいぶん違うんだろうな…？と思ひながら、初めてのクリスマス準備に入ります。◆店に出すカレンダーやスケジュール帳など、どれくらい用意すればよいのか予測がつかず、旧CLC店の例年の数字が参考になるかという、コロナはそこにも立ちほだかります。◆けれども「予測のつかなさ」と格闘しているのは、私たちだけではないでしょう。◆この便りをお読みくださった皆様が、心も体も守られますように…。そして、いつかマスクを外して満面の笑顔で、書店においてくださいますように…。◆アフガニスタンで起こっている厳しい現実、そこで生きる人たちのためにも、皆様とともに一生懸命祈りたいと思ひます。 【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの
バックナンバーはこちらから

